

第53回 野津左馬之助先生と『松江市史』

平成27年7月14日、持田公民館で1時間ほど話をする機会があった。野津篤持田公民館長から、『松江市史』「考古資料」から持田地区の古墳・遺跡部分を抜粋した小冊子を作ったので、地元の方に関係する話をしてほしいとの依頼を受けての事だった。

まず館長さんから開会のご挨拶があり、冒頭「館長の野津です」とおっしゃったことから、かつて西尾克己さんから聞いた野津左馬之助先生のことを、ふと思い出した。「朝酌川の西川津遺跡発掘調査で作業員さんから、“野津左馬之助先生の家は持田で、いつも風呂敷包みに何かを入れて松江に向かわれていたそうさ。偉い先生だった。”・・・」という話である。

そこで話の最初に、持田地区は『島根県史』を編纂された野津左馬之助先生のご出身地で、『松江市史』は先生の業績を追いかけられているような仕事と紹介したが、後で左馬之助先生の事を聞いてみると、なんと野津館長は先生のご子孫で、自宅には左馬之助先生が残された資料がそのまま保存されているとのことで、大変びっくりした。

不思議な縁をきっかけに、松江市史料編纂室は野津左馬之助旧蔵資料を調査することとなったのである。(調査は野津館長のご厚意をいただきながら現在継続中)



(左の写真は野津左馬之助先生)

さて、野津左馬之助は、慶応3年(1867)、島根郡東持田村(現松江市東持田町)に、野津善蔵、カヤの長男として生まれた。幼名を馬之助、11歳のときに左馬之助と改め、後年、号を天籟と称した。明治21年、島根県尋常師範学校を卒業、同年、美濃郡津田尋常小学校訓導に任命されている。師範学校の同期に『松江市誌』を編纂した一人上野富太郎がいる。明治30年(1897)に30歳で島根県尋常中学校、明治32年(1899)に長野県長野中学校、明治37年(1904)に島根県第三中学校(後の杵築中学校)に勤務して、明治43年(1910)に退職。翌明治44年(1911)から昭和5年(1930)までの約20年間、島根県史編纂委員として精力的に史料の収集を行い、『島根県史』全9巻を編纂した。松江の中学校から長野中学校に突如転じているが、晩年家族に語ったところによると、長野が東京に近く、勉学に好都合と考えたためであったという。

野津の執筆した著書・論文は『島根県史』をはじめ、『飯石郡誌』、『鹿足郡誌』、『大原郡誌』、『松本巖伝』など、その業績は多方面にわたるが、注目されるのは、当時の日本史学の進み具合を意識し、つねに学問的な地方史を編纂しようと努力したことである。

『島根県史』の編纂は、明治43年の県議会で可決され、翌44年4月に野津が島根県史編纂委員に囑託されて始まった。編纂事業は県史第一巻が刊行された大正10年(1921)までの10年間を主に史料収集のために費やしており、島根県史編纂事業を通して集められた史料(「県史史料」)は、整然と筆写または撮影され、製本されて現在も島根県立図書館にて保管されている。また、学史に著名な『島根県史』4巻は島根県内の古墳を扱って1巻としたもので、考古学が浸透していない当時としては画期的な業績である。さらに、山代二子塚古墳を前方後方墳として紹介しており、考古学上「前方後方墳」の名称提唱でも知られている。(経歴は『明治百年島根の百傑』参照)

野津左馬之助の墓所は松江市持田町の生家近くの共同墓地の一角にある。墓石正面には中央に大きく「故野津左馬之助大人之奥都城」と刻まれ、右側面には「昭和十八年二月十七日 歸幽」とある。左側には経歴が刻まれ、「故野津左馬之助慶應三年正月生し明治二十一年七月島根県尋常師範学校卒業小學校二就職中勉學二励三明治三十年四月島根県第一尋常中學校

助教諭二試補明治三十二年九月長野縣長野中學校教諭二轉勤明治三十七年四月島根縣第三中學校二轉勤明治四十三年二月退職明治四十四年四月島根縣史編纂吏員を命ぜられ編纂ヲ完成
ス昭和五年二月退職其後島根縣史蹟名勝天然記念物調査會委員ヲ命ぜられ以テ現時ニ至ル」とある。勉学に励み、徹底した史料調査に基づく『島根縣史』をほぼ個人の努力によって編纂・完成させた野津の76年の生涯が記されている。

現在、松江市では10年計画で「松江市史編纂事業」が進められており、約130名の執筆者と9名の史料編纂室員で、計画的な史料調査と『松江市史』の刊行を行っている。ところで、松江市史編集委員長の井上寛司先生の言を借りれば、全国的に見て自治体史編纂にはAからCの3つの波(段階)があった。まず最初のA段階は、大正、昭和初期を中心とする戦前期。これは、主として地元の歴史研究者によるもので、島根県内でも野津左馬之助の『島根縣史』(大正10から昭和5)、奥原福市(碧雲)の『八束郡誌』(大正15)、上野富太郎・野津静一郎の『松江市誌』(昭和16)など、地域に残る史料を丹念に収集し、執筆するという全国的にも先進的な優れた著作が存在する。次のB段階は、1950から60年を中心とする時期で、これは専門研究者が客観的に地方を分析したもので、全国的にはこの段階が多いが、実は島根県内の自治体史は残念ながら、段階に至るものは多くない。C段階は1990年代からの新しい自治体史で、地域住民に視点を据えた未来を展望するような自治体史である。島根県内では『大社町史』や『宍道町史』がそれにあたり、『松江市史』はこのC段階に含まれる、というものである。

このことから分るように、『松江市史』編纂の困難さの一つは、野津(左馬之助)の『島根縣史』、奥原の『八束郡誌』、上野・野津(静一郎)の『松江市誌』以来、島根県、松江市では新たな史料調査に基づく『県史』『市史』の発刊がなされず、『松江市史』は、本来、その後の『県史』『市史』で掲載されるような史料まで調査し、掲載せざるを得ない点にあった。もちろん克服すべき歴史記述は少なくないが、『松江市史』は『島根縣史』(大正10から昭和5)、『八束郡誌』(大正15)、『松江市誌』(昭和16)を受け継ぐ次の段階とも言える。

それにしても、野津左馬之助、奥原福市、上野富太郎、野津静一郎らの偉業がありながら、自治体史という観点からみれば、時々の実実はあったにせよ、『松江市史』に至る約一世紀はあまりにも長い。

(平成28年3月1日史料編纂室長/稲田信)